常磐大学大学院同窓会会報

思索の杜 Vol.11

2017年6月1日　発行

編集・発行　常磐大学大学院同窓会

〒310-8585 水戸市見和1-430-1
電話 029-232-2511（大学代表）
E-mail: gradouso@tokiwa.ac.jp
URL: http://www.tokiwa.ac.jp/~gradouso/

新体制となった常磐大学大学院人間科学研究科の教育

常磐大学大学院人間科学研究科長
森山　哲美

早春の候，木々の芽も膨らみ始めました。常磐大学大学院同窓会会員の皆様におかれましては御清栄のこととお慶び申し上げます。

このたび同窓会会長の森山賢一先生，副会長の飯森明子先生，そして幹事の橋本直様より，新人間科学研究科の教育事情を紹介してほしいとの要請を受けました。僭越ながら新人間科学研究科の教育は何を志向しているのかについて，新体制になってからの1年間を振り返りながらここにご報告申し上げます。

新人間科学研究科は，人間が関わる多様な問題に，総合的・統合的な視点から取り組むという人間科学の理念のもと，自立した研究者と高度専門的職業人を養成することをその教育目的としています。その目的の実現に向けて，現代の人間が抱える多様で解決困難な問題を，ジェネラリストの視点で包括的にとらえて，スペシャリストとして分析し，その解決を志向できるような人材を育成したいと考えています。

新人間科学研究科は，人間が関わる問題を生命体としての人間の個体レベルの問題から集団レベルの問題として捉え，この複雑で解決困難な問題に対して，学生が自分の専門領域を基盤としながらも，他の専門領域にも目を向け，それを自家薬籠とできるような，自在なカリキュラムを構成しました。具体的には，遺伝子医療と公衆衛生，それに関わる生命倫理，家族と地域における生活の安全と安心，生態系の安定，自然災害や人災（戦争被害も含む）による被害への対応と対策，経済やエネルギー問題を扱う科目群です。

このカリキュラムから御賢察いただけるかと思いますが，新カリキュラムには，被害者学とコミュニティ振興学の両研究科の研究テーマが盛り込まれています。したがって，新人間科学研究科は既存の3研究科を統合した研究科です。教員も若返りました。優れた研究業績のある若手の先生方にも研究科委員に加わっていただきました。2016年10月15日（土）には，彼らが中心となって「人間科学シンポジウム～地域社会における人間科学の役割～」と題するシンポジウムを開催しました。

新体制となって1年が過ぎ，研究科として解決しなければならない事項はいまだいくつかありますが，私たちは，本研究科の研究教育の充実に向けてさらなる努力を続けてまいります。同窓会会員の皆様におかれましては，引き続き本研究科へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。最後に同窓会の皆様のますますのご健勝を祈念して擱筆いたします。

同窓会会長挨拶

常磐大学大学院同窓会長
森山　賢一

常磐大学大学院同窓会会員の皆様におかれましては，ご健勝にてご活躍の事と拝察いたしております。

会員の皆様には，日頃より同窓会活動ならびに運営にご支援，ご協力をいただき，心より感謝申し上げます。

常磐大学大学院は，1989年に設置以来，307名の修了生を輩出し，2005年に設立された大学院同窓会も，現在会員数205名となり，着実に組織として定着が図られ，将来にわたり安定した同窓会の基盤となることと思います。日頃より，学校法人常磐大学より，多くのご支援，ご協力を賜っていることも前提にございます。厚く御礼申し上げます。この3月20日にも，大学院修了式が行われ，その後，同窓会入会式を開催し，9名の新たな会員が入会されました。心より入会を歓迎いたします。常磐大学大学院同窓会は，その目的を，「会員相互の親睦研修を図るとともに，常磐大学大学院との連絡を保ちながら，発展を期し，かつ後進の研究の便宜を図ること」としています。

会員の方々は，全国各地のみならず，海外においても活躍され，これらを繋ぐ懸け橋として同窓会も機能していくことが求められます。

これまで同様に毎年1回刊行されている同窓会会報『思索の杜』をはじめ，隔年開催されます，同窓会総会時に行われています懇親会，研修講話会など，同窓会員間で情報交換が積極的になされるようにさまざまな活動が実施されています。さらに，出版事業やホームページの充実にも取り組んで，更なる会員間の交流が行われることを期待したいと思います。

同窓会員の皆様におかれましては今後とも，何卒ご支援くださいますよう，よろしくお願い申し上げます。

常磐大学大学院のますますのご発展とともに，同窓会会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

TOKIWAマスコットキャラクター「ときわんこ」を紹介します

名　前	ときわんこ
誕生日	2012年7月7日
性　別	男の子
お仕事	学校法人常磐大学の魅力を発見し，学内外に向けて紹介をすること。 学校法人常磐大学で学ぶ学生・生徒・園児のお手伝い，卒業生や入学を希望する皆さんの応援をすること。
趣　味	・読書（いつかビブリオバトルに参加したいと思っている） ・スポーツ観戦 （応援しているサッカーチーム：水戸ホーリーホック）
好きな食べ物	・ぷよもち，ポテトプリンセス ・ラーメン（水戸のご当地ラーメン「スタミナラーメン」がお気に入り）

同窓のまど

現場と教育をつなぐコミュニケーション研究

研究成果の現場還元を心がけて
～ウエルフェア・リングイスティックの観点から～

澤　則子

「えっ，今，大学院入学？」私が修士課程第Ⅱ領域（人間と社会・コミュニケーション）入学を決めた時の周囲の反応です。（現在大学２年の息子の大学受験と重なったこともありますが。）

それまで私はアナウンサーの仕事を経て，「わかりやすい話し方」「コミュニケーション力向上」「朗読は伝えること」などをテーマに15年以上講師として活動をしておりました。講師を依頼されるのは，行政，教育機関，社会福祉及び生涯学習の場など幅広い分野からです。

アナウンサーという職業は「ことば」をコミュニケーションの手段として有効に活用することが求められてきました。その経験から私の授業の進め方は，自分で考えた実践カリキュラムを作成し，受講生自身がリアルタイムに起こるコミュニケーション場面を体験してもらっています。そうして人とのコミュニケーションを円滑にするためにはどうしたらよいか，自分で考えることができるようになる参加型方式を取り入れています。

しかし自分の経験に基づくやり方なので，これまで私がやってきたことを実際的，学問的，学際的にとらえ直し，裏付けを行い，更なる効果的なコミュニケーションのあり方を考察したいとの思いから大学院で学ぶことにしたのです。大学院での学びは，私を大きく成長させてくれる時間でした。

修士課程における研究フィールドは，水戸市協働推進事業（行政と市民が協働でまちづくりに参加する事業）におけるミーティング場面でした。ミーティングにおける参加者らのコミュニケーションのやり方をエスノメソドロジー／会話分析の手法で丁寧に分析していくため，ミーティング場面を録音・録画しました。昨今の情勢から考慮すると，協力していただくことは難しいのですが，以前から私は水戸市の審議委員を複数務めさせていただいているので，そのご縁で水戸市から研究協力を承諾していただきました。現在も同じフィールドで研究を継続しております。また行政を研究フィールドにすることが出来たおかげで，修士課程を修了して間もなく第36回社会言語

学会で発表することも出来ました。水戸市、市民団体の方々，指導してくださった先生方に心から感謝しております。

その時，社会言語学会の目標として「ウエルフェア・リングイスティックに向けた研究」が掲げられていることを知りました。ウエルフェア・リングイスティックとは「社会の福利に資する言語・コミュニケーションの研究」という意味です。これまでの研究成果をどのように社会で役立てるのか，そしてどのような研究が，今必要なのか，これまでアナウンサーとして現場中心に活動してきた私には，この目標がとても響きました。そして，今その第一歩を踏み出しております。水戸市役所には，市民との協働事業推進を担当する職員が各課にいらっしゃいます。その職員の方々を対象に「市民とどう関わっていくか」についてのコミュニケーション研修会の講師をさせていただいております。

大学院を修了したことにより，現在は尚美学園大学で「コミュニケーションの基礎」という科目を担当しております。またこの春からは常磐大学で講師としてお世話になることになりました。大学での講師を機に現場に重点を置く実践家，そして研究者，双方の立場からコミュニケーションに携わっております。学生たちに対する思いは，コミュニケーションはノウハウ、マニュアルではない。日常生活で多様に遭遇するコミュニケーション場面でどうすることが良いのか。このことを伝えたいと思っております。そのために目の前にいる大学生、生徒、受講生に真摯に向き合い，それぞれの個性をプラスの方向にどう導きだすか，私ならではの指導が出来るよう日々精進しております。常磐大学大学院で学んだから今の自分がいると，心から実感しております。

（2015年３月人間科学研究科修士課程修了　現・尚美学園大学総合政策学部講師，フリーアナウンサー，八戸前沖さば大使（観光大使），2017年度～常磐大学人間科学部講師）

認知症高齢者の看護と老年看護学実習の実際
ー プロセスレコードを活用して ー

滝 沢 真智子

認知症は病名ではなく症状の名前である。認知症が現れる疾患は，アルツハイマー病，脳血管性認知症，レビー小体病，前頭側頭葉萎縮症，プリオン病などである。認知症類似の症状を出す疾患は，うつ病，甲状腺機能低下症，正常圧水頭症，慢性硬膜下血腫などがある。

認知症は，物忘れ（記憶障害）を主症状として，見当識障害，理解力・判断力障害，失行・失認・失語などの中核症状と，せん妄，徘徊，異食などの周辺症状（BPSD：行動・心理学的症状）を呈する。

認知症高齢者と接するときに，記憶障害や周辺症状により意思疎通の障害がみられることが多く，看護者としての関わり方や援助，主にコミュニケーションの困難さを感じている。看護学生が認知症高齢者との関わりで困難な場面としては，ケアを抵抗する場面，攻撃的言動がみられた場面，家に帰りたいと訴える場面，環境変化により混乱する場面，判断力障害による不快感の場面といわれる。

勤務校の老年看護学実習は３年次後期に３週間の実習が行われる。そこでグループホーム等で３日間の実習を通して認知症高齢者の看護を学ぶ。認知症高齢者との関わりを再構成し，高齢者の言動の意味，さらに学生自身を振り返ることを目的としてプロセスレコードを３場面記録する。

プロセスレコードは対人関係技能の訓練といわれ，1952年にアメリカのヒルデガート・E・ペプロウが提唱し，日本には1973年『人間関係の看護論』が発刊され活用されている。

実習に用いるプロセスレコードの記録用紙は，認知症高齢者の年齢，性別，病名，生活状況の紹介，この場面を取り上げた理由，気になっていること，コミュニケーションプロセスと考察で構成している。

看護学生はプロセスレコードを記録することにより，自身の困難な場面を取り上げ，認知症高齢者の言動等から認知症の疾患の理解と認知症高齢者がこだわっていることや苦痛について理解し，考察では，認知症高齢者の苦痛に対し共感的理解の援助につなげていくことができるようになる。自己を振り返りながら認知症高齢者とのコミュニケーション技法を身につけていけるよう指導をしている。

総会・懇親会 を開催しました。

「遠方より友来る，また楽しからずや。」

同窓会総会を開くたび，新幹線に乗ってわざわざ遠方からやってきて参加される会員が必ずいらっしゃる。今回も遠方から新幹線ではるばるおいでくださった会員がいらっしゃった。久しぶりの再会に会場では何度も歓声があがった。

大学院が創立されて20年以上，海外からの留学生も常磐大学大学院で学び，今では大学院の同窓会員は日本全国，いや，世界各国，国際機関で数多くの会員が活躍している。同窓会の活動を通してお互いの活躍を知ることは，自らの日々生活の活動力の源にもなることを改めて確認できる。昨年も，2016年６月11日，常磐大学大学院同窓会の研修会・総会・懇親会を東京，田町の常磐大学芝浦キャンパスで開催した。

まず，研修会で茨城キリスト教大学看護学部講師の滝沢真智子会員による研修講話「認知症高齢者の看護と老年看護学実習の実際　ー プロセスレコードを活用して　ー」を伺った。教育・研究としての「介護」問題として，さらに一人一人の家族をめぐる現実に向き合う身近な問題として，それぞれ講話から多くを学ぶことができた。講話内容について詳しくは別掲の記事をご覧ください。

次いで，総会では，2014-2015年度の活動・会計報告，2016-2017年度の活動計画と予算が承認された。あわせて，随時，更新をおこなえる体制を整えた大学院同窓会ホームページ（ http://www.tokiwa.ac.jp/~gradouso/ ）の運営状況も紹介した。常磐大学ＨＰより訪問者別メニュー，「卒業生の方」から大学院同窓会へお入りください。『思索の杜』と併せて，どうぞご覧ください。

常磐大学大学院同窓会　収支決算報告
平成26(2014)年4月1日～28(2016)年3月31日

I. 収入の部

	収入の内訳	金額　(円)
繰越金	平成24-25年度繰越金	1,788,047
会費	同窓会費（20,000x30名）	600,000
	懇親会費(@2,000x12名)	24,000
その他	利息	709
	収入合計	2,412,756

II. 支出の部

	支出の内訳	金額　(円)
会報	編集費(26年度、27年度発行分)	191,160
謝礼	謝礼	34,000
会費返金	会費返金(@20,000x 5　うち2名重複入金)	100,432
送料	郵送料(切手、はがき含)	45,427
文具消耗品	文具 （封筒，トナーなど）	17,450
懇親会	懇親会費(26年5月17日飲食等)	38,207
会議	会議費(編集会議、役員・幹事会議)	5,642
労務費	労務・運営実務担当者謝金	75,000
連合同窓会・交通費	連合同窓会協力・交通費(会長/副会長等)	33,000
HP管理	ホームページ管理　委託	32,400
引当金	研究活動支援事業引当金(@50,000x2年分)	100,000
	支出合計	672,718

III. 残高の部

	残高の内訳	金額 (円)
収入	収入金額合計　平成26年4月1日-28年3月31日	2,412,756
支出	支出金額合計　平成26年4月1日-28年3月31日	672,718
	差引残高合計	1,740,038

VI. 次年度繰越金

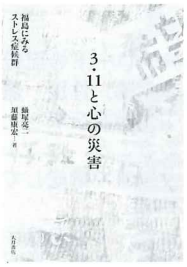
	次年度繰越金　　¥	1,740,038

平成26～27年度における収入、支出について監査したところ、その内容は適切なものと認めます。

平成28年５月３１日　　会計監査　　森島　彰俊

会員の新刊紹介

蟻塚亮二・須藤康宏著
『3.11と心の災害　福島にみるストレス症候群（大月書店,2016年）1800円（税別）



現在，臨床心理士，精神保健福祉士として福島県相馬市で活躍中の須藤康宏会員の共著作。2011年，3.11での甚大な被害を受けた相馬市での壮絶な須藤会員の体験は，すでに『思索の杜』7号でも語られているが，このたび新しく本書が広く世に出されることになった。

被災者たちは，津波と原発事故で土地も地域も家族・友人もすべてを根こそぎ失った。精神的な外傷体験に見舞われた彼らは，「心の傷」とそれぞれ格闘し苦しんできた。深刻なストレス・トラウマの実相について，本書は，診療の現場での被災直後から長期的な視点まで詳細に伝えている。

被災当時，現地で起きていたこと，原発事故と避難，震災がもたらした人間関係の損壊などが著者自身の経験から紹介された後，避難に伴うストレス症候群，トラウマによる否定的認知，などが論じられる。震災など大災厄トラウマを乗り越えるための課題と考察は，共感と将来の希望につながる。臨床心理の専門家にも，一般読者にも一読を是非おすすめしたい。

【医）メンタルクリニックなごみ副院長】

三澤 進 先生，伊田 政司 先生，長井 進 先生

御退職 記念講演会を開催

2017年3月8日，今年度末で退職される三澤 進 先生（人間科学部教授・大学院人間科学研究科教授），伊田 政司 先生（人間科学部教授・大学院人間科学研究科教授），長井 進 先生（人間科学部教授・大学院人間科学研究科・被害者学研究科教授）の記念講演会が常磐大学見和キャンパスで開催され，大学院生をはじめ，多くの卒業・修了生や教職員が参加しました。常磐大学・大学院におけるこれまでの教育・研究活動を（時折参加者の笑いを誘うような学生や教員とのエピソードを交えながら）振り返りつつ，自身の専門分野について講演いただきました。御三方のこれまでの常磐大学・大学院における功績と尽力に感謝するとともに，今後の益々のご活躍を願って，会場は拍手喝采に包まれ記念講演会の幕を閉じました。

母校の現況

在籍者数と活動

2017年2月1日現在の大学院在籍者数は，人間科学研究科博士課程（後期）6名，人間科学研究科修士課程13名，被害者学研究科博士課程（後期）2名，被害者学研究科修士課程2名，コミュニティ振興学研究科1名，合計24名です。
（会員・大友由梨香．現・常磐大学学事センター大学院担当）

◆大学院同窓会ホームページが新しくなりました

一昨年より新管理体制でホームページを更新しております。今後も，様々な情報の発信や交換の場として随時更新してまいります。どうぞ利用ください。
URL：http://www.tokiwa.ac.jp/~gradouso/

◇◇事務局からのお願い◇◇◇

当会からの郵便物が返送されるケースが増えております。転居・所属変更の際には，当会にもご連絡ください。また，会員が著書を刊行された時には，ご一報ください。新刊紹介などでご紹介いたします。
E-mail：gradousou@tokiwa.ac.jp

◆本年度の大学院同窓会賞について

大学院同窓会賞は，学際的研究・教育を特徴とする常磐大学大学院で学び，当該年度1年間において優秀な研究論文を執筆して，全研究科の教員によって選定推薦された修了生1名を表彰し，将来の活躍を同窓会として支援しようとするものです。2016年度修士課程修了生に対する大学院同窓会賞に推薦された修了生はいらっしゃいませんでした。今後の在学の皆様のご研究とご活躍を大いに期待しています。

会員情報

◆入会

2017年3月修了予定者
《人間・博士》錦織　福子
《人間・修士》海　涛，網代　悠加，
足立　拓哉，小澤　誠一，風間　梨沙，
河合　菜緒子，安岡　春葉
《被害者学・修士》山戸　郁子

常磐大学大学院同窓会役員

会　長　森山　賢一
副会長　飯森　明子
監　事　森島　彰俊
幹　事　滝沢真智子　橋本　直　佐藤　隆弘
小笠原尚宏　前小屋千絵　近藤　誠
大友由梨香

会報「思索の杜」編集委員会

委　員　飯森　明子　滝沢真智子　橋本　直
小笠原尚宏　大友由梨香

編集後記

イギリスのEU離脱やアメリカ合衆国の大統領交代など，2016年は，世界情勢において大きな変化をむかえた年でした。我が国においても同様に，社会経済のグローバル化の急速な進展，情報技術産業の劇的な進歩など，大きな転換期を迎えております。

実学を重んじた母校の教育内容が，この激動の現代社会という荒波を渡り進むための羅針盤となり，更には各界を支える礎となることを願っています（編集委員長・橋本 直）。